

全国学力・学習状況調査からみる 学習指導要領の実施状況と、それ から示唆されること

お茶の水女子大学
富士原 紀絵

発表の目的とアウトライン

<目的> 令和5年度全国学力・学習状況調査（学調と略す。）の本体調査と、お茶の水女子大学による追加分析の結果から、学習指導要領の実施状況と課題を確認する

○注意：お茶大の追加分析は保護者調査を活用した調査であり、家庭の格差と学力との関係进行分析したもの。家庭格差の問題は学校では解消は出来ない。しかし、学校で家庭の格差に起因する学力格差解消に可能な取り組みがあることを想定した調査

<アウトライン>

1. 学習指導要領の成果の一部を学調の本体調査をもとに確認
2. 学調と同時に実施された保護者調査を活用したお茶大の追加分析をもとに、格差の克服に成果が上がっている学校の特徴（カリキュラム・マネジメント、指導法、学校や教職員の取り組み等）を紹介
 - ①統計分析結果から
 - ②訪問調査結果から
3. 調査結果を踏まえた知見ー特にカリキュラム・マネジメントに関わって

○成果が上がっている学校の定義は、ここでは一先ず家庭の格差に起因する学力格差の解消に効果ある取り組みを行っている学校とする。

1-1. 全国学力調査（教科）の概況

- 「全国学力調査の設問を見ることで、国が求めている学力はこういうものかということが分かる」（後述する追加分析の学校訪問調査でしばしば聞いてきた言葉）
→全国学力調査の設問＝国語、算数・数学、理科、英語の学習指導要領の「資質・能力」の一部の習得状況を測定するものとして学校現場では理解されている
- 初年度からの継続的な経年比較が出来る設計になっていないため、一部年度の試行的な経年変化の結果しか出ていないが、『令和3年度 経年分析調査結果』によれば、平成28年度調査と令和3年度調査を比較すると、平均点の大幅な変動は見られない（算数・数学の結果は「若干」向上している可能性がある）
https://www.nier.go.jp/21chousakekkahoukoku/kannren_chousa/keinen_chousa.htm
- 全国規模では各教科の例年の平均点の大幅な変動はみられず、学調で測定しうる「資質・能力」については、現場はその定着のために相当頑張り続けていることが分かる

1-2. 令和5年度の学校質問紙・児童生徒質問紙結果からみる現行学習指導要領の特徴に関する実施状況

○国研のホームページで公開されている「令和5年度全国学力・学習状況調査 報告書」より、以下の項目に注目。

(a)「主体的、対話的で深い学び」に関する項目

(b)「個別最適な学び（個別的な指導）と協働的な学び」に関する項目

(c)「カリキュラム・マネジメント」に関する項目

(結論を先取りすると・・・) 経年データは横ばいか向上

aとbについて、児童生徒の回答結果から学校は着実に取り組んでいること、またabcとも学校は取り組んでいるという自覚がある。

○また、(d) 文部科学省が研究を委託した追加分析では、

「主体的・対話的で深い学び」は「学校に行くのは楽しい」「自分にはよいところがある」といった自己有用感と高い相関があり、またその係数はSESや学力を統制しても変化しないことが示されている。

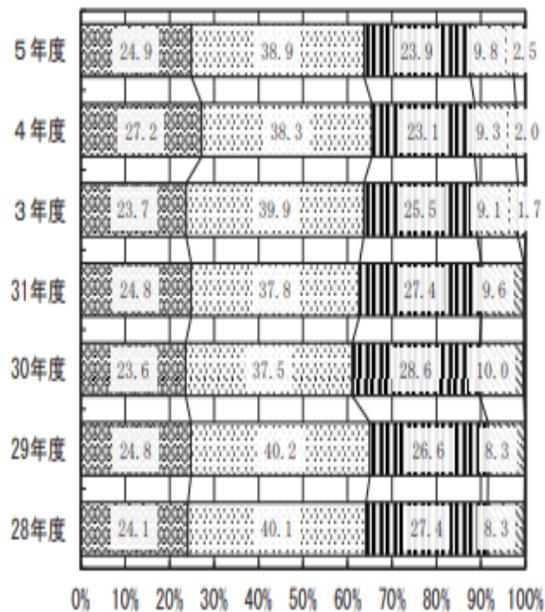
⇒ SESや学力が深刻な交絡因子となっている（結局裕福で学力の高い層が授業も積極的で、自己有用感も高い）
可能性は低く、どの層にも主体的・対話的で深い学びがポジティブな影響を与えることが示唆。

(a) 「主体的、対話的で深い学び」に関する項目

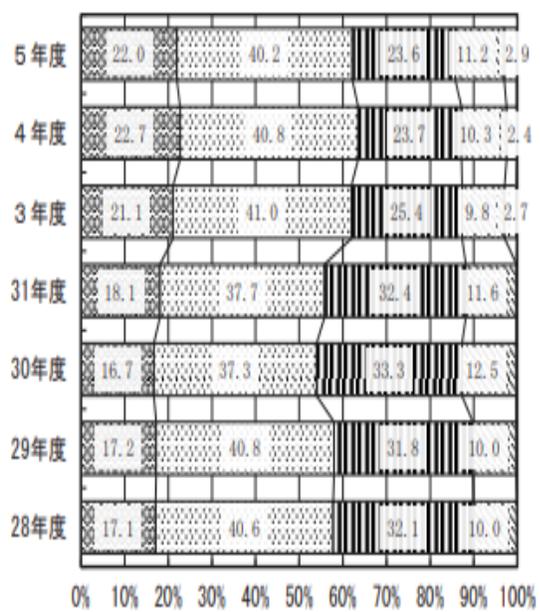
・児童生徒質問紙調査結果

	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	32	→	→	5年生まで〔1、2年生のとき〕に受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して発表していましたか
中	36	→	→	

【小学校】

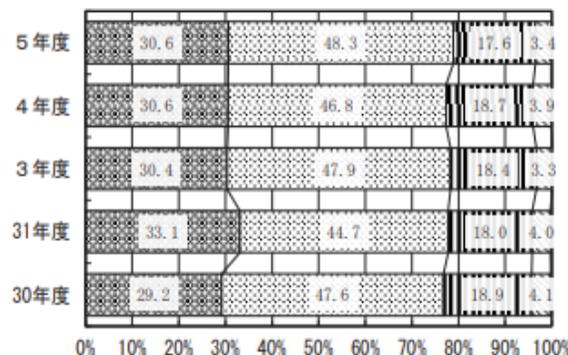


【中学校】

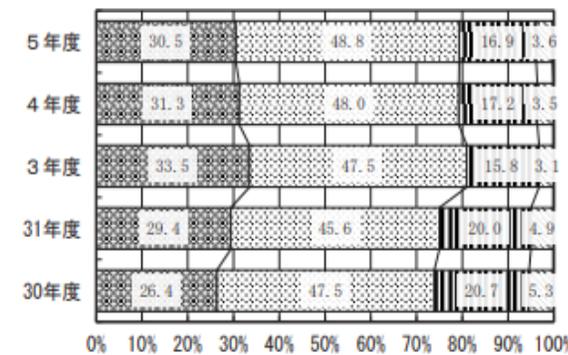


	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	33	→	→	5年生まで〔1、2年生のとき〕に受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか
中	37	→	↗	

【小学校】

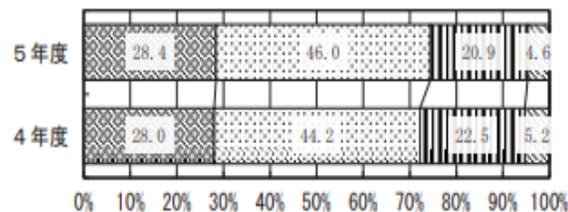


【中学校】

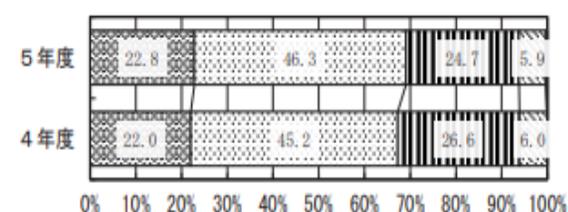


	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	34	→	△	5年生まで〔1、2年生のとき〕に受けた授業では、各教科などで学んだことを生かしながら、自分の考えをまとめる活動を行っていましたか
中	38	→		

【小学校】



【中学校】

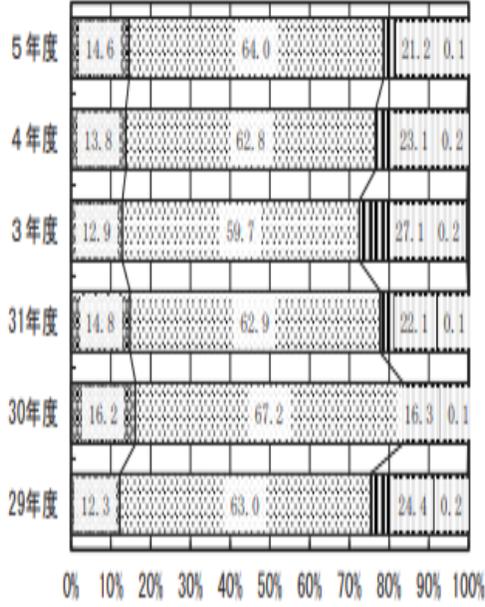
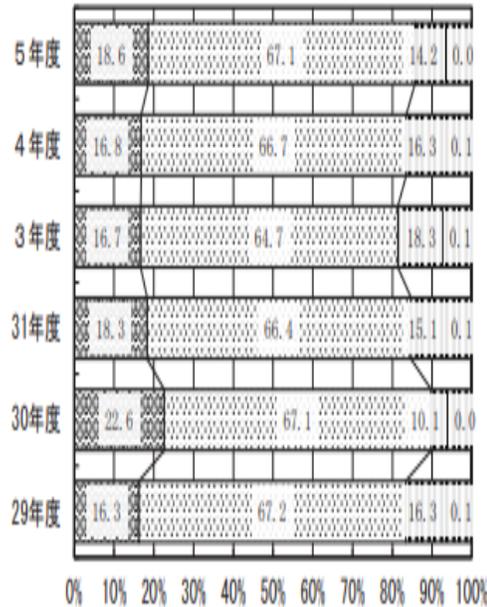


学校質問紙調査結果

	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	35	→	→	調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、各教科等で身に付けたことを、様々な課題の解決に生かすことができるような機会を設けましたか
中	35	→	→	

【小学校】

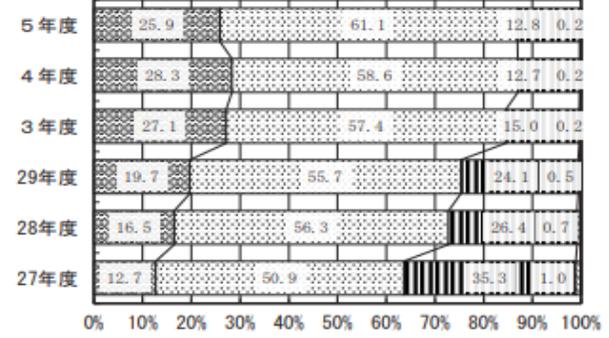
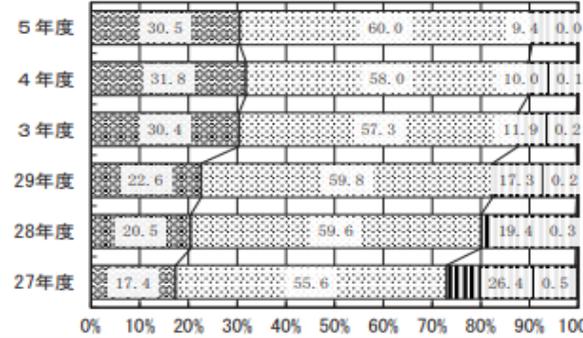
【中学校】



	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	33	→	??	調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、授業において、児童生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を取り入れられましたか
中	33	→	??	

【小学校】

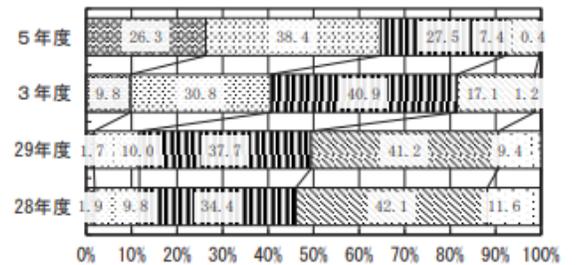
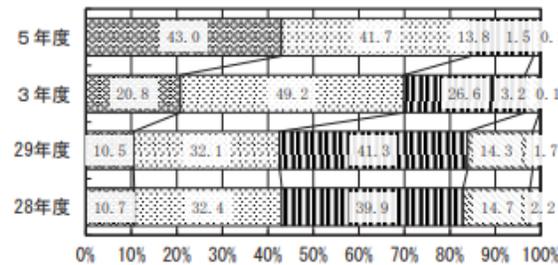
【中学校】



	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	36	↑	??	調査対象学年の児童生徒に対する指導に関して、前年度に、本やインターネット、図書館資料などを活用した授業を計画的に行いましたか
中	36	↑	??	

【小学校】

【中学校】

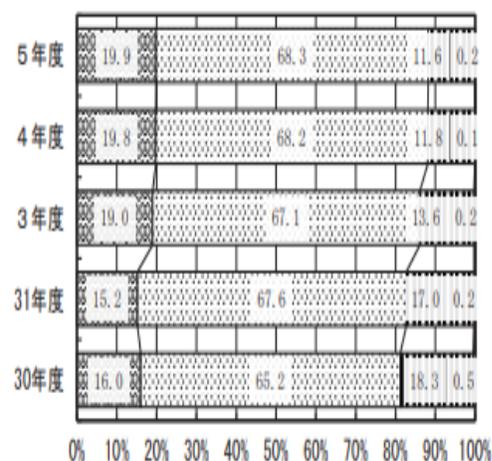
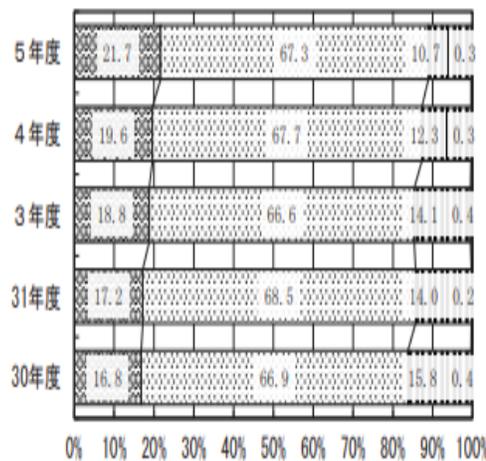


	質問番号	前回の比較	最大9回前との比較	質問事項
小	26	→	↗	調査対象学年の児童生徒は、授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていると思いますか
中	26	→	↗	

	質問番号	前回の比較	最大9回前との比較	質問事項
小	27	→	↗	調査対象学年の児童生徒は、授業において、自らの考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組立てなどを工夫して、発言や発表を行うことができていると思いますか
中	27	→	↗	

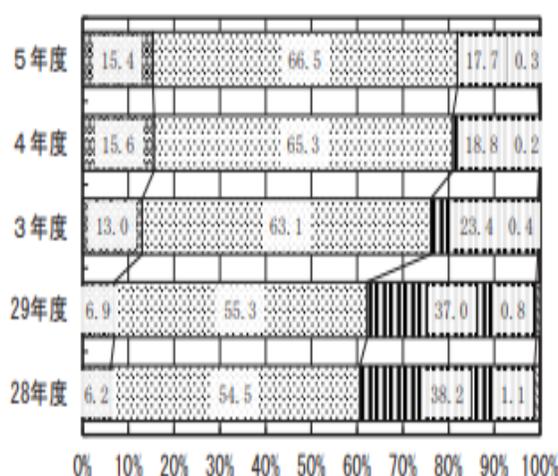
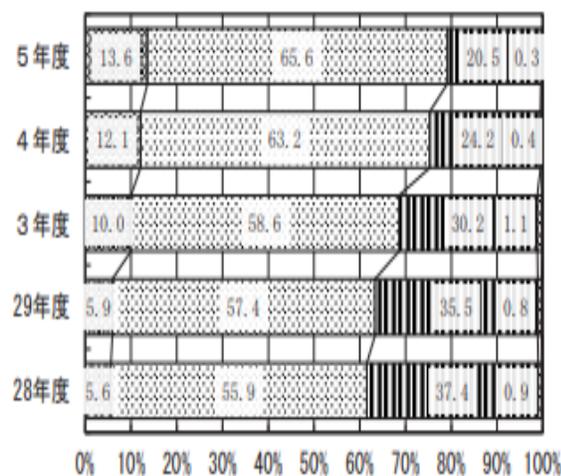
【小学校】

【中学校】



【小学校】

【中学校】

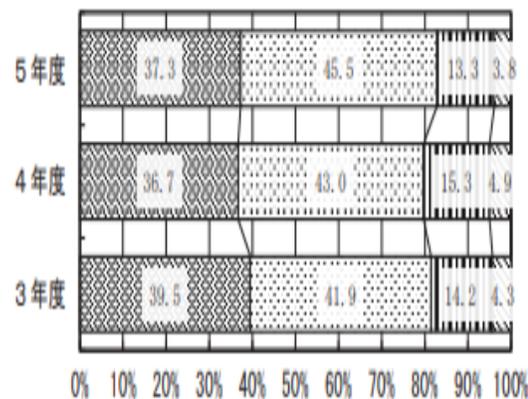


(b) 「個別最適な学び（個別的な指導）と協働的な学び」に関する項目

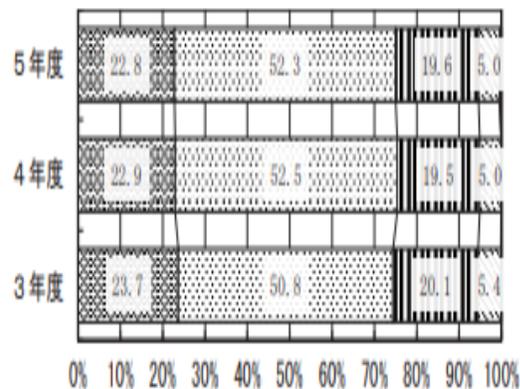
・ 児童質問紙調査結果

	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	35	→	→	5年生まで（1、2年生のとき）に受けた授業は、自分にあった教え方、教材、学習時間などになっていましたか
中	39	→	→	

【小学校】

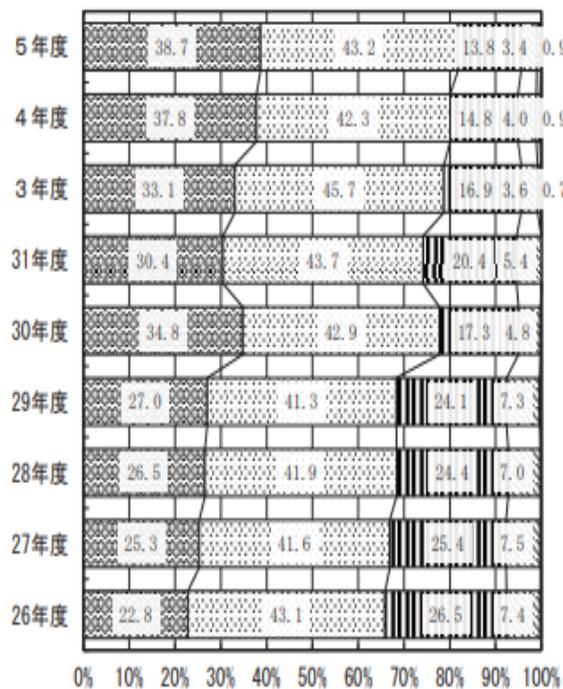


【中学校】

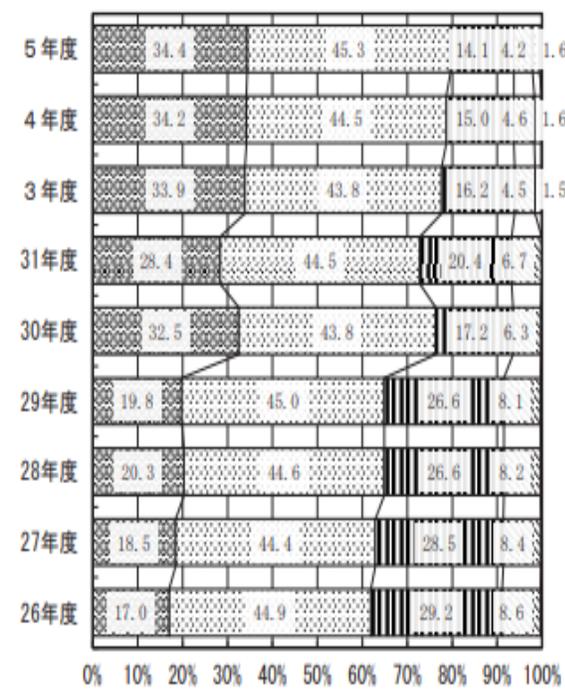


	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	36	→	??	学級の友達〔生徒〕との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか
中	40	→	??	

【小学校】

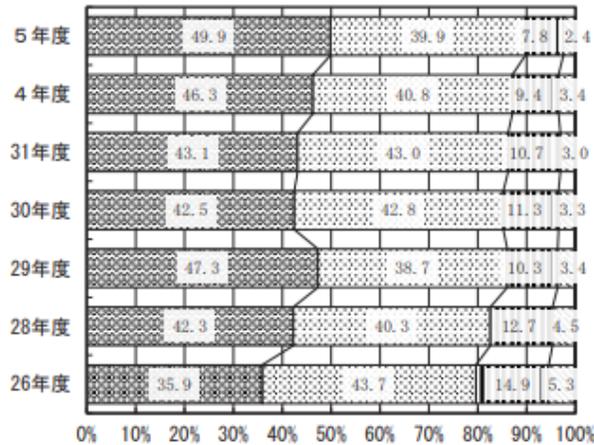


【中学校】

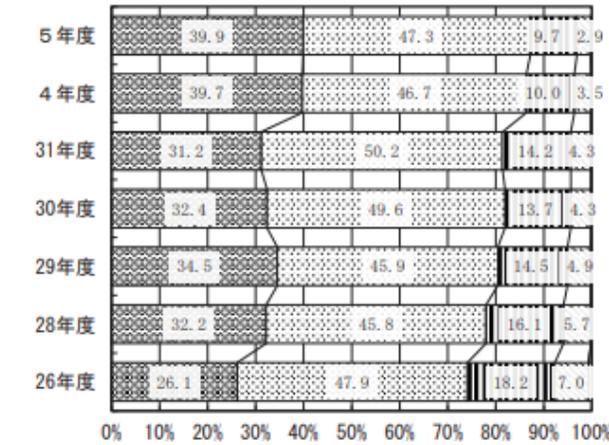


	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	5	→	??	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか
中	5	→	??	

【小学校】

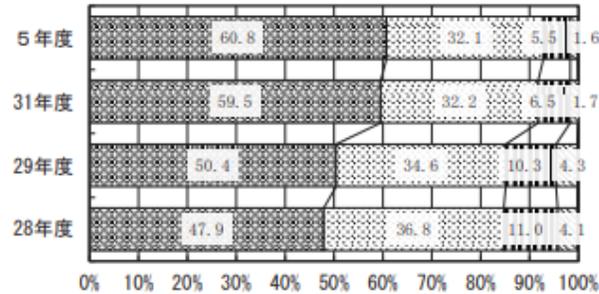


【中学校】

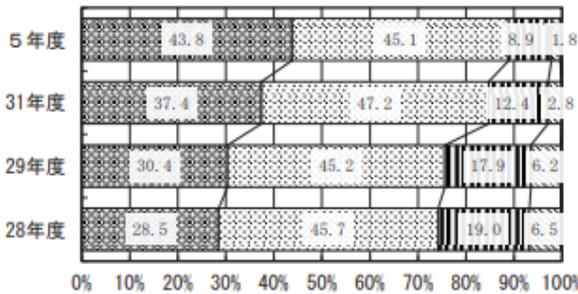


	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	6	→	?	先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれていると思いますか
中	6	→	??	

【小学校】

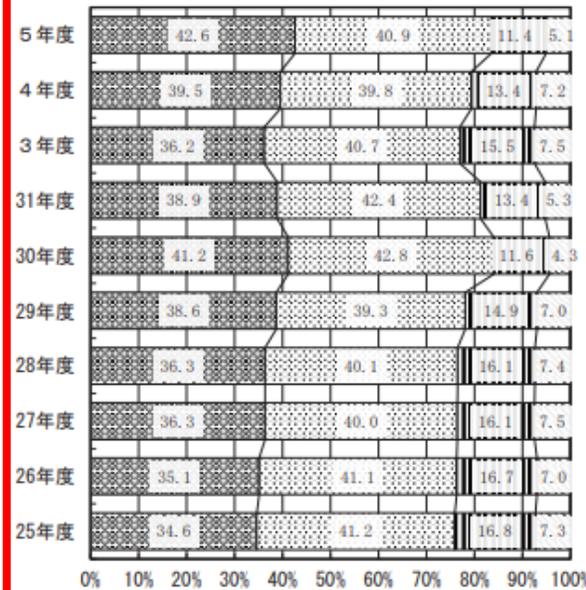


【中学校】

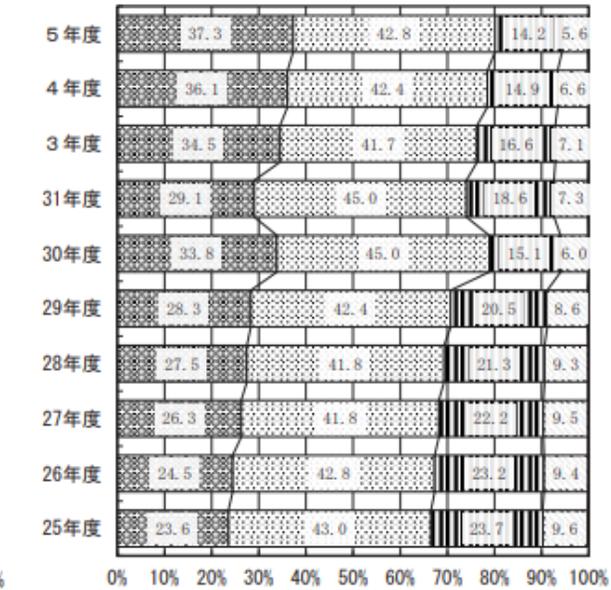


	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	4	→	?	自分には、よいところがあると思いますか
中	4	→	??	

【小学校】



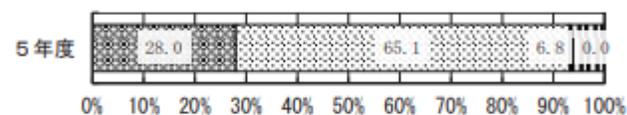
【中学校】



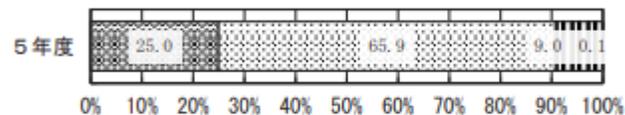
- 学校質問紙調査結果

	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	31	新		調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、学習指導において、児童生徒一人一人に応じて、学習課題や活動を工夫しましたか
中	31			

【小学校】

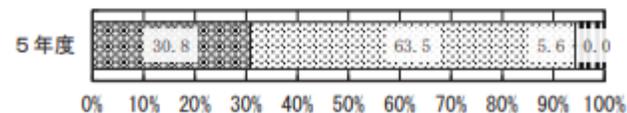


【中学校】

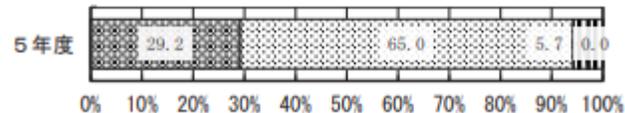


	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	32	新		調査対象学年の児童生徒に対して、前年度までに、児童生徒が、それぞれのよさを生かしながら、他者と情報交換して話し合ったり、異なる視点から考えたり、協力し合ったりできるように学習課題や活動を工夫しましたか
中	32			

【小学校】



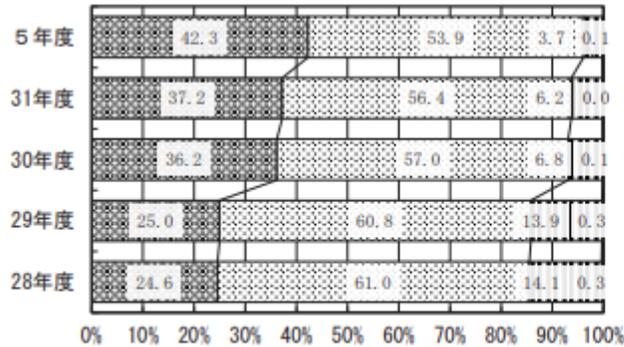
【中学校】



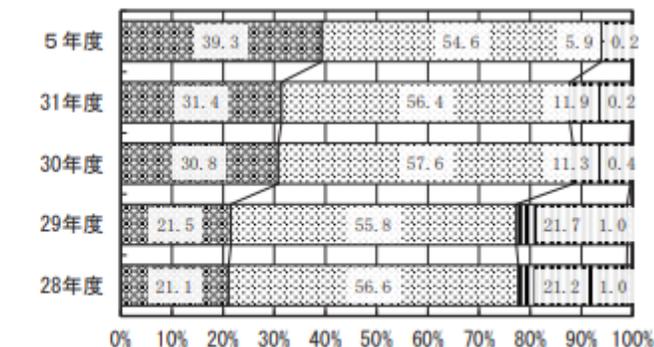
(c) 「カリキュラム・マネジメント」に関する項目

	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	18	→	??	教育課程表(全体計画や年間指導計画等)について、各教科等の教育目標や内容の相互関連が分かるように作成していますか
中	18	↑	??	

【小学校】

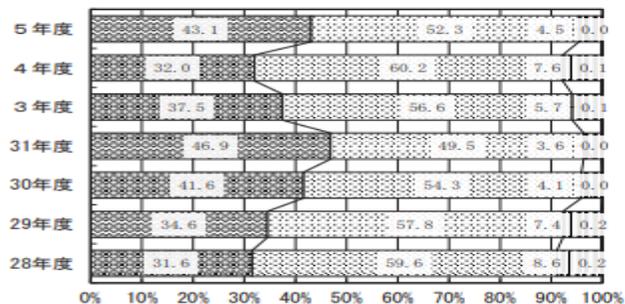


【中学校】

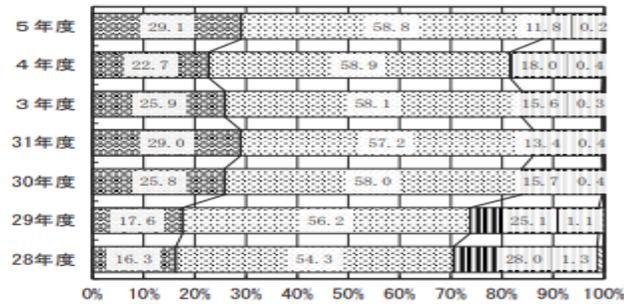


	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	20	→	→	指導計画の作成に当たっては、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせていますか
中	20	↑	??	

【小学校】

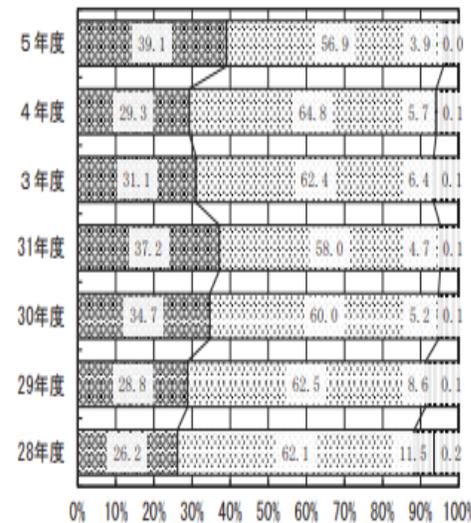


【中学校】

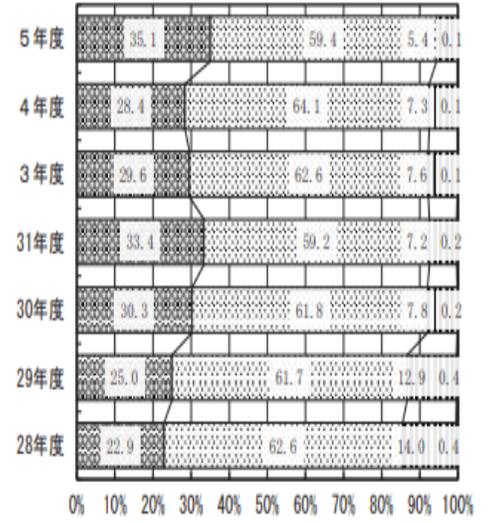


	質問番号	前回の比較	最大9回前の比較	質問事項
小	19	→	↑	児童生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データなどに基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立していますか
中	19	→	↑	

【小学校】



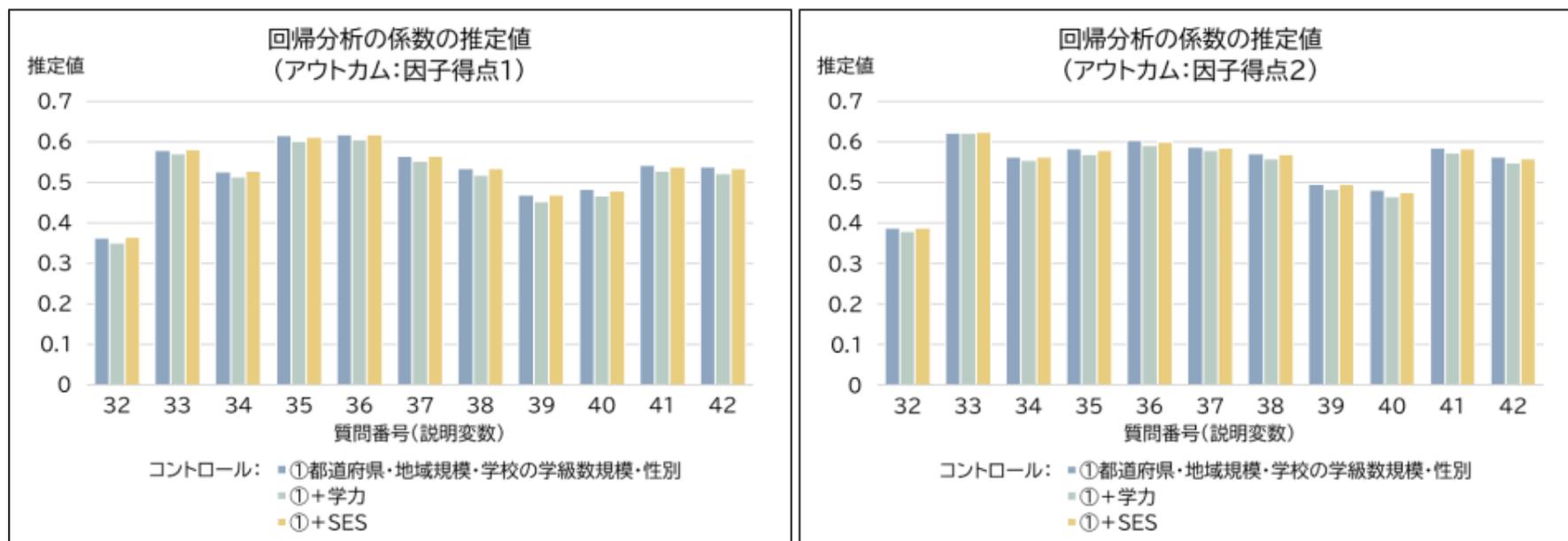
【中学校】



(d)生徒質問紙追加分析：主体的・対話的で深い学び×自己有用感

分析①：SESや学力を統制した回帰分析（R5小学校）

- 前述のモデルを用いて、学力やSESをコントロールした場合とコントロールしない場合の係数の推定値の違いを確認した
 - 棒グラフはカテゴリ7・8の質問回答の係数の推定値を表す
 - 例えば質問32への回答が4件法で1向上すると、因子得点1のスコアが0.3～0.4標準偏差程度上昇することがわかる
- 学力をコントロールした場合、わずかに係数の推定値が小さくなる傾向があるものの、学力やSESのコントロールによって推定値は大きく変わらない
 - 学力やSESの水準が同程度の児童を比較しても推定値が大きくは変わらないことから、学力やSESによる交絡が深刻なバイアスには繋がっていない可能性を示唆している
 - サンプルサイズが非常に大きいため推定結果はいずれも統計的に有意である（※）



※いずれもp値≒0となっている。推定値、N数、t値、p値については、Appendixにて表を掲載している

2. 保護者調査を活用した追加分析の概要

- 学調の全国調査に加えて追加調査として実施されている保護者調査は、これまで平成25年度、平成29年度、令和3年度の3回。
- 調査目的は家庭状況と児童生徒の学力等の関係について分析するため児童生徒の家庭における状況、保護者の教育に関する考え方等に関する質問紙調査を抽出調査で実施。

令和3年度の調査対象数

* 国立教育政策研究所のホームページに
調査概要が掲載

	保護者		(参考) 学校	
	対象数	有効回答数 (率) *	対象数	有効回答数 (率) **
小学校	33,879	30,325 (89.5%)	600	595(99.2%)
中学校	82,410	66,837 (81.1%)	750	738(98.4%)

- お茶の水女子大学では分析チームを組み、保護者調査による統計分析（平成25、平成29、令和3年度の保護者調査と本体調査にもとづく）と、それを元にした学校訪問調査（平成25・26年度、平成29・30年度、令和4年度）の2本立てで分析を実施。
- 格差社会において家庭に起因する学力格差克服のために学校で出来ること、教育委員会で出来ることを検討。調査年度単位の成果報告書は文部科学省ホームページに「調査結果を用いた追加分析」一覧に掲載。平成の2カ年分の成果は2021年に『学力格差への処方箋－[分析] 全国学力・学習状況調査』勁草書房として出版

2-① 統計分析結果：格差を克服している学校の特徴

- 次のスライドからの表は、前掲『学力格差への処方箋』第10章、浜野隆による「統計分析から見る「格差を克服している学校」の特徴」165-180頁より引用。詳細は同書を参照。

- 「格差を克服している学校」は以下の両方を含んでいる

「成果の上がっている学校」（子供の社会経済的地位 = SESから予測される学力を大きく上回っている学校）

「校内格差を克服している学校」（通塾の有無やSESの高低に関係なく、一定の学力を保障している学校）

→→→「格差を克服していない学校」のデータと比較

* 社会経済的地位 = SESの指標について、お茶大では家庭の所得、父親学歴、母親学歴を合成。OECDのように家庭の本の冊数という指標を用いる場合もあり、得られるデータや分析者によって指標は変わるが、いずれも家庭の社会経済や文化資本を反映するもの。

統計分析結果から得られる知見ーカリキュラム・マネジメントの観点から

- カリキュラム・マネジメントの内容として小中とも格差の克服に効果がみられたのが、「PDCAサイクルの確立」の取り組みの有無。
- 学習指導と学習評価の計画の作成にあたって「教職員同士が協力し合っている」点に、成果の上がっている学校と上がっていない学校で最大の差が見られる。一部の教員の頑張りに依存するのではなく、計画→実践→評価（児童生徒の評価と学校・教職員の取り組みの評価）に「学校全体として」取り組むことが機能している。キーワードとして「教職員同士の協力」「学校全体として取り組む」「全教職員の間で共有」が浮かび上がっており、カリキュラム・マネジメントにおいて、教職員の協力関係と情報共有の重要性が示唆。
- 「指導計画の作成にあたっては、地域等の外部の資源を含めて活用」し「地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機会」の設定に効果がみられる。とりわけ小学校では地域の学校支援ボランティアの仕組みづくりや彼らによる授業サポートで効果がみられる。
- 小学校では教科等横断的な視点でカリキュラムを組織することで効果がみられ、中学校では言語活動に重点を置いた指導計画に効果がみられる。

→効果あるカリキュラム・マネジメントの取り組みで、小・中で違いが見られる点について、何に起因しているのかまでは分析できない（様々な予測・解釈はあり得るが・・・）。

統計分析結果から得られる知見—主体的、対話的で深い学びの観点から

- キーワードは明確で、「言語活動」「話し合う」「発言」「発表ができるよう指導」「分かりやすく文章に書かせる」「振り返る」「書く習慣」など、「言語」で「表現」させる（アウトプットさせる）活動が多い。
- 小中とも傾向として「様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするような発問や指導をした」すなわち「深い学び」に教師が指導を焦点化することで差が開いている。
- 「学び合い」を重視する授業が調査初回から継続的に効果のある取り組みのキーワードとして上がっている
- 以上が教科を超えて、学校全体の取り組みとして意識されていることで効果が



校内での実践の共有化を図るためのカリキュラム・マネジメントの取り組みと深く関係していることが示唆

「格差を克服している学校」のカリキュラム・マネジメント（小・中）

	小学校	中学校
成果が上 がっている 学校	<ul style="list-style-type: none"> ・指導計画について、<u>知識・技能の活用</u>に重点を置いて作成している ・児童の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の<u>P D C A サイクル</u>を確立している ・指導計画の作成に当たって、<u>各教科等の教育内容を相互の関係</u>で捉え、学校の教育目標を踏まえた<u>横断的</u>な視点でその目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列している 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導計画について、<u>言語活動</u>に重点を置いて作成している ・生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の<u>P D C A サイクル</u>を確立している
校内格差 を克服し ている学 校	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の<u>P D C A サイクル</u>を確立している ・指導計画の作成に当たっては、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、<u>地域等の外部の資源</u>を含めて活用しながら効果的に組み合わせている 	<ul style="list-style-type: none"> ・指導計画について、<u>言語活動</u>に重点を置いて作成している ・生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の<u>P D C A サイクル</u>を確立している ・指導計画の作成に当たっては、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、<u>地域等の外部の資源</u>を含めて活用しながら効果的に組み合わせている

「格差を克服している学校」における指導方法・学習規律の特徴

	小学校	中学校
成果が上がっている学校	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な<u>考えを引き出したり</u>，思考を深めたりするような発問や指導をした ・授業の最後に学習したことを<u>振り返る</u>活動を計画的に取り入れた ・学級やグループで<u>話し合う</u>活動を授業等で行った ・自分で調べたことや考えたことを分かりやすく<u>文章に書かせる</u>指導をした ・将来就きたい仕事や夢について<u>考えさせる</u>指導をした ・各教科等の指導のねらいを明確にした上で，<u>言語活動</u>を適切に位置付けた 	<ul style="list-style-type: none"> ・各教科等の指導のねらいを明確にした上で，<u>言語活動</u>を適切に位置付けた ・学級やグループで<u>話し合う</u>活動を授業等で行った ・<u>発言や活動の時間</u>を確保して授業を進めた ・資料を使って<u>発表ができる</u>よう指導した ・授業において，生徒自ら学級やグループで課題を設定し，その解決に向けて<u>話し合い</u>，まとめ，<u>表現する</u>等の学習活動を取り入れた ・言語活動について，国語科だけではなく，<u>各教科，道徳，外国語活動，総合的な学習の時間及び特別活動</u>を通じて，<u>学校全体として取り組んでいる</u> ・生徒自ら学級やグループで課題を設定し，その解決に向けて<u>話し合い</u>，まとめ，<u>表現する</u>などの学習活動を学ぶ<u>校内研修</u>を行っている
校内格差を克服している学校	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>総合的な学習の時間</u>において，課題の設定からまとめ・<u>表現</u>に至る探究の過程を意識した指導をした ・自分で調べたことや考えたことを分かりやすく<u>文章に書かせる</u>指導をした ・各教科等の指導のねらいを明確にした上で，<u>言語活動</u>を適切に位置付けた ・国語の指導として，前年度までに，<u>目的や相手に応じて話したり聞いたりする</u>授業を行った ・国語の指導として，前年度までに，<u>書く習慣</u>を付ける授業を行った ・算数の指導として，前年度までに，<u>計算問題などの反復練習</u>をする授業を行った ・国語の指導として，前年度までに，<u>漢字・語句など基礎的・基本的な事項</u>を定着させる授業を行った 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分で調べたことや考えたことを分かりやすく<u>文章に書かせる</u>指導をした ・<u>学習規律</u>（私語をしない，話をしている人の方を向いて聞く，聞き手に向かって話をする，授業開始のチャイムを守る等）の維持を徹底した ・<u>道徳</u>の時間において，生徒自らが考え，<u>話し合う</u>指導をした ・授業の中で<u>目標（めあて・ねらい）</u>を示す活動を計画的に取り入れた ・言語活動について，国語科だけではなく，<u>各教科，道徳，外国語活動，総合的な学習の時間及び特別活動</u>を通じて，<u>学校全体として取り組んでいる</u>

「格差を克服している学校」における教員研修・教職員の取り組み

	小学校	中学校
成果が上がっている学校	<ul style="list-style-type: none"> ・学習指導と学習評価の計画の作成に当たっては、<u>教職員同士が協力し合っている</u> ・個々の教員が、自らの専門性を高めていこうとしている教科・領域等を決めており、<u>校外の教員同士の授業研究</u>の場に定期的・継続的に参加している ・教職員は、<u>校内外の研修や研究会</u>に参加し、その成果を<u>教育活動に積極的に反映</u>させている 	<ul style="list-style-type: none"> ・言語活動について、国語科だけではなく、各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動を通じて、<u>学校全体として</u>取り組んでいる ・生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を学ぶ<u>校内研修</u>を行っている ・学校全体の言語活動の実施状況や課題について<u>全教職員の間</u>で話し合ったり、検討したりしている ・教員は、<u>校外の教員同士の授業研究</u>の場に定期的・継続的に参加している
校内格差を克服している学校	<ul style="list-style-type: none"> ・学校全体の<u>学力傾向や課題</u>について、<u>全教職員の間</u>で共有している ・学習指導と学習評価の計画の作成に当たっては、<u>教職員同士が協力し合っている</u> ・学校全体の言語活動の実施状況や課題について、<u>全教職員の間</u>で話し合ったり、検討したりしている 	<ul style="list-style-type: none"> ・言語活動について、国語科だけではなく、各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動を通じて、<u>学校全体として</u>取り組んでいる ・生徒自ら学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を学ぶ<u>校内研修</u>を行っている ・学校全体の言語活動の実施状況や課題について、<u>全教職員の間</u>で話し合ったり、検討したりしている

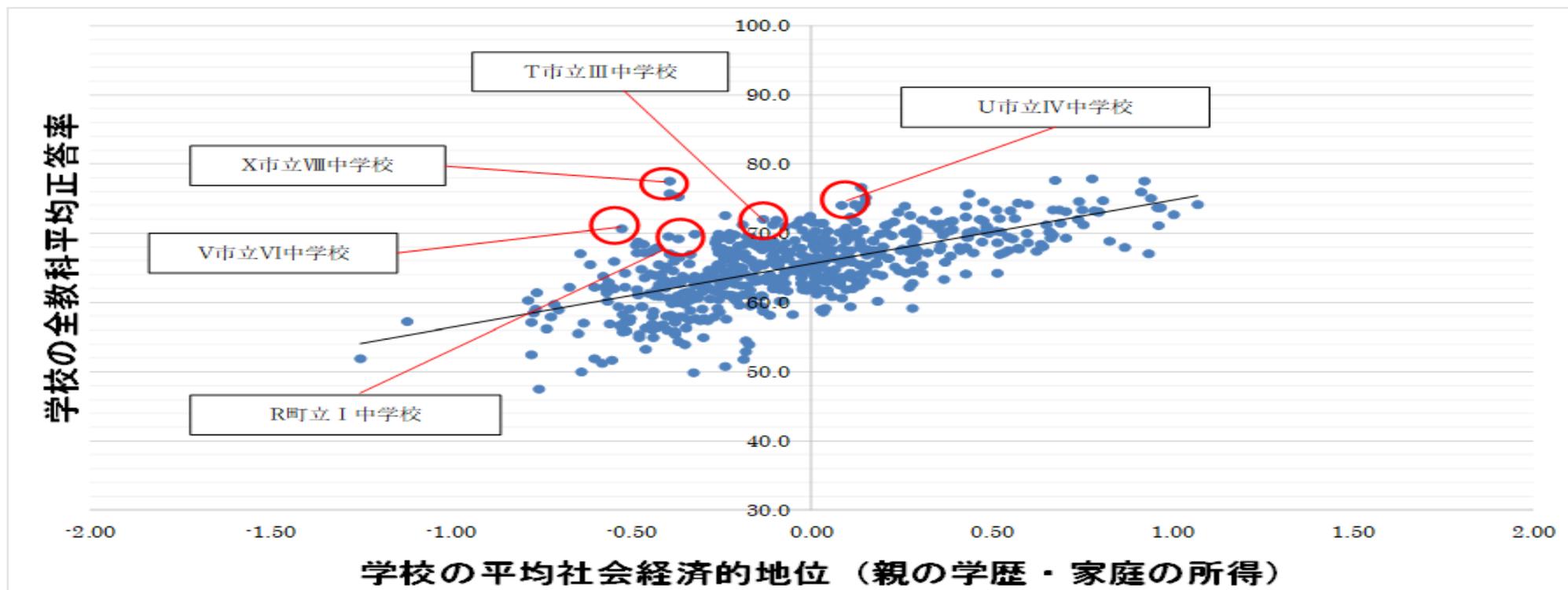
効果的學校における教員研修・教職員の取り組み

	小学校	中学校
成果が上 がっている 学校	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>地域の人材</u>を外部講師として招聘した授業を行った ・<u>地域や社会をよくするために何をすべきか</u>を考えさせるような指導を行った ・授業や課外活動で<u>地域のことを調べたり、地域の人と関わったり</u>する機会の設定を行った ・学校支援地域本部などの<u>学校支援ボランティア</u>の仕組みにより、保護者や地域の人が学校における教育活動や様々な活動に参加してくれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業や課外活動で<u>地域のことを調べたり、地域の人と関わったり</u>する機会の設定を行った
校内格差を 克服してい る学校	<ul style="list-style-type: none"> ・調査対象学年の児童に対して、前年度までに、<u>ボランティア等による授業サポート（補助）</u>を行った。 ・調査対象学年の児童に対して、前年度までに、<u>地域の人材</u>を外部講師として招聘した授業を行った ・調査対象学年の児童に対して、前年度までに、<u>地域や社会をよくするために何をすべきか</u>を考えさせるような指導を行った ・学校支援地域本部などの<u>学校支援ボランティア</u>の仕組みにより、保護者や地域の人が学校における教育活動や様々な活動に参加してくれる 	<ul style="list-style-type: none"> ・調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、<u>地域の人材</u>を外部講師として招聘した授業を行った ・調査対象学年の生徒に対して、前年度までに、<u>博物館や科学館、図書館</u>を利用した授業を行った ・前年度全国学力・学習状況調査の自校の結果について、<u>保護者や地域の人たちに対して公表や説明</u>を行った

2-② 訪問調査結果：格差の克服に成果が上がっている学校の特徴

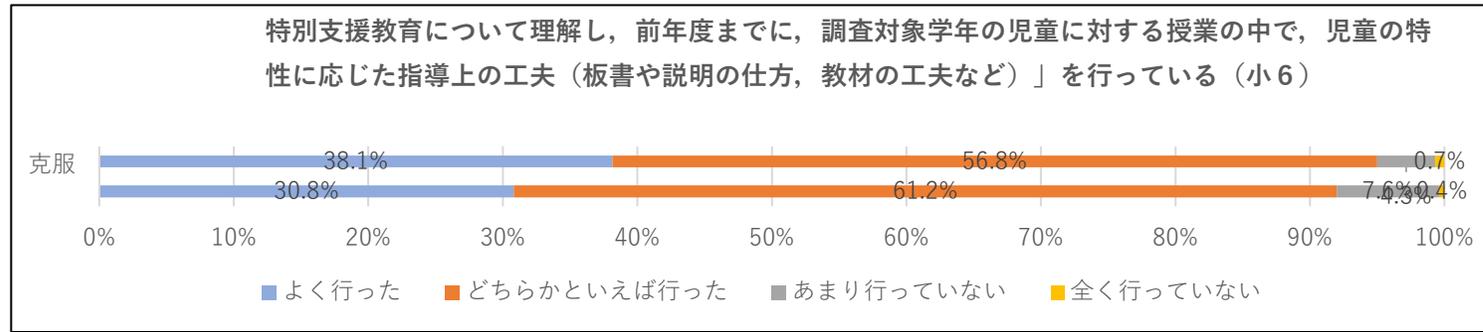
- 訪問調査対象校数：6カ年で小学校43校、中学校29校。訪問調査校を管轄する54の市区町村教育委員会
- 訪問調査対象校選定のイメージ（詳しくは『学力格差の処方箋』第11章、各年度分析報告書を参照のこと）

図 11-6 2017 年度・学校の学力と社会経済的背景の関係—抽出対象校（580 校）（中 3）←



5 年通じ、ほぼ小・中共通で高い成果を上げている学校の特徴

- ① 主体的、対話的で深い学びの実現に向けた授業改善の推進（令和3年度調査では全ての学校で「主体的・対話的で深い学び（部分的も含め）の授業作り」を校内研究・研修のテーマにしていた）
- ② 特別支援の視点を入れた学校・授業づくり（以下の統計分析でも確認できる）



- ③ 言語に関する指導や学習規律の徹底
- ④ 基礎基本の定着の重視、補充学習
- ⑤ 一人も見逃さない個別指導
- ⑥ 少人数指導・少人数学級（令和3年度調査では習熟度からTTに変化）
- ⑦ 家庭学習指導と家庭学習習慣の定着
- ⑧（保幼）小中連携、子どもの長期的な育ちを支える視点
- ⑨ 地域や保護者との良好な関係を基盤とした積極的な地域連携
- ⑩ 管理職のリーダーシップ（学校により「リーダーシップ」の質に違いがみられる）

令和4年度お茶の水女子大学の追加分析報告より

研究課題2と5を網羅した学校の共通項と教育委員会の取組

学校

- 個々の子どもに寄り添い、出来るまでやりきらせる基礎基本の徹底
- 子どもが主体的に学習に取り組むための授業の流れ（授業スタンダード）の校内での共有
- 家庭学習、とくに自主学習の良い取組の成果を校内で共有
- 小中連携、小中一貫教育の取組
 - 子どもの交流の意義、子どもの自己理解を促す意義、教師の合同研修により子どもの情報を途切れずに把握・共有する意義
- 校内研修・研究を「自校のもの」とする認識の高さ
- 教師が日頃から子どものことを話しやすい関係性を生み出す工夫
- 特別支援教育の理解の共有。福祉面での配慮が必要な場合には外部専門家と積極的に連携
- 校内の教員間で様々な情報・事態を日常的に共有しやすい環境・同僚性の高さ

教育委員会

← 運用・活用は学校に任せる

- 全国学力・学習状況調査を検証する組織の設置（平成27頃～）
 - ←学力向上に向けた授業改善のアイデアを検討し提供
- 学習指導要領（「主体的、対話的で深い学び」）のコンセプトを実現するための授業アイデアや授業スタンダード等の提供
 - ・地域住民に向けた教育委員会の取組の広報活動
 - ・予算措置を必要とする手厚い人的支援（例として都道府県配置のSCやSSWに加えた独自配置等。自治体によって様々）

注：研究課題2：SESの低い層において学力面で成果を上げている学校の取組はどのようなものか？
研究課題5：コロナ禍における「SESの低い層において学力面で成果を上げている学校」の取組はどのようなものか？

3-1. 調査結果を踏まえた知見 ーカリキュラム・マネジメントに関わって①

- 前スライドを令和5年6月1日全国学力・学習状況調査の専門家会議で発表した際、中学校関係者から「ここまで全てをやり尽くさねばならないのか」という意見（悲鳴？）が
 - 上げた特徴をすべて「あたりまえ」としてやり尽くすには相当なカリキュラム・マネジメントが必要。教職員全員の尽力に加え、とりわけ管理職（校長）が取り組みを妨げる様々な要因を排除するための負担が大きい。
 - 過年度調査も含め、訪問調査対象校では「偶々学調を受けた年の児童生徒の質が高かった」ことや「校長が相当なベテランで学校経営、地域への影響力等で相当な力量がありカリキュラム・マネジメント力が高い（教育委員会談）」こと、管轄教育委員会が条件整備（とりわけ人的支援）に相当支援を行った、といった好条件が重なったケースもある。
 - 各学校の置かれた環境・条件、ここまでの調査結果を踏まえれば小・中学校の学校段階に応じてカリキュラム・マネジメントの重点の置き方に違いはあってしかるべき（「よい」とされる様々な取り組みを網羅的・緻密に企画・計画化する以上に、一度立てた計画を実施の途中で柔軟に変更し、効果をもたらすであろう点にマネジメントを注力するー教育委員会は支援することが重要）

3-2. 調査結果を踏まえた知見

ー ーカリキュラム・マネジメントに関わって②

- 統計調査と訪問調査結果からは、複数の取り組みの相乗効果で成果がみられたことが分かる（特定の取り組みで成果を上げたわけでは無い）
- ただし、訪問調査で敢えて学校に「何が学力向上の取り組みとして、一番効いているかと思うか」と尋ねてみると、「予習より復習」、「基礎・基本の徹底」という声。さらに「（補充学習等も行い）できるまでやりきらせる指導」、「家庭学習・宿題」という声が圧倒的。
 - 学力下位層の底上げ（「子どもの学力には学校が責任を持つ」という言質が複数得られている）を目的とし、復習と基礎・基本を重視するために、補充（補習）学習と家庭学習に力を入れざるを得ない。
 - 中学校の場合、昼休みや放課後に授業時間内に学習内容の定着に問題がある生徒に対して教師が付いて恒常的な補充（補習）を実施。家庭学習でやってこなかったプリントや自主学習ノートを教師の見守りの中、昼休みや放課後にやらせる。いずれも徹底して「やりきらせる」。
 - 小中とも宿題と自学ノート（なお自学ノートも学校から課されているので一種の宿題）、日記（生活ノート）の3点セットを課し、課したのものには教師が丁寧なコメントを書き込んでいる。
 - ***いずれも教師の「献身さ」が無ければ成立しない。
- 持続可能性の観点から課題はないか。

復習と基礎・基本、家庭学習（宿題）の重視の背景として考えられること

・考えられる背景として、以下のa～cがありうる。

a. 市販のテストやハイスイクスなテストの構成や内容（＝評価に関わる）→実際に「点数」が取れているという結果（実感）

b. 社会に根強い「基礎・基本」観→1950年代や2000年当初の学力低下論のいずれも学力の「基礎・基本」が3Rsや知識（常識・教養）と同義→学校としては、その習得に力を入れ続けざるを得ない（止められない）

c. 現行学習指導要領での基礎・基本に関する記述から 第一章総則第一の2

「(1) **基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ**、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに、主体的に学習に取り組む態度を養い、個性を生かし多様な人々との協働を促す教育の充実に努めること。その際、児童の発達の段階を考慮して、児童の言語活動など、学習の基盤をつくる活動を充実するとともに、家庭との連携を図りながら、児童の学習習慣が確立するよう配慮すること。」

・一方、一例として小学校国語の学習指導要領には以下の記載もある。その他教科等においても、教科固有の見方・考え方を働かせるような「活動を通して」学ぶことが明記されているものも多い。

「(3) 第2の各学年の内容の**〔知識及び技能〕に示す事項については、〔思考力、判断力、表現力等〕に示す事項の指導を通して指導することを基本**とし、必要に応じて、特定の事項だけを取り上げて指導したり、それらをまとめて指導したりするなど、指導の効果を高めるよう工夫すること。」

→→1. と2. の調査結果から、学校では「主体的、対話的で深い学び」の授業改善に力を入れていることが明らか。「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう態度」の形成に大いに寄与していることが想定される。

しかし、その一方で、3Rs等への過度な重視が根強く、「**思考力、判断力、表現力等**」に示す事項の指導を通しての指導よりも、とりわけ厳しい環境の学校では、復習と反復重視の宿題・家庭学習に注力する結果になっている。

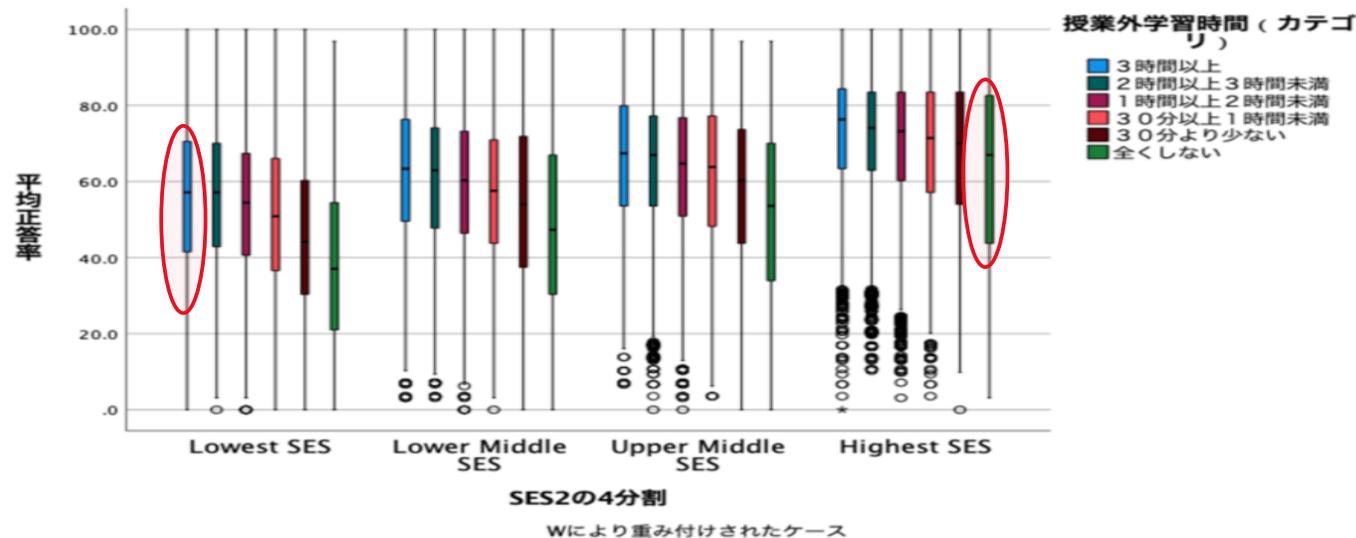
SESと授業外学習と学力との関係

- 令和3年度の追加調査の分析結果より

1. 授業外学習時間（努力）は学力格差を緩和するか？

社会経済的背景（SES）を統制したうえで、授業外学習時間（努力）の学力への効果を分析。

図表1 SES別授業外学習時間別平均正答率の箱ひげ図（中3）



→①SESを統制しても、努力の学力への効果は確かに存在する

②学力に対する努力の効果は確かに存在するが、家庭の社会経済的背景による影響が強く存在しているのも事実

- 平成25年度調査より一貫して同じデータが得られている。

→学校外での学習時間＝努力とみなせば、4つそれぞれのSES層単位で長い学習時間は功を奏している

- 一方で、学校外の学習時間ではSESを克服するには限界がある（前スライドの2つの赤丸の部分の比較）

→その理由として 様々な解釈が成り立つだろうが、想定されることとして・・・、

a. SESの高い家庭の保護者の乳幼児期からの子どもへの関わり方、家庭の文化資本といった家庭環境の影響（メカニズムや因果関係を示すのは難しい。また、小・中学校でどうにかできるものではない）

b. SESの低い家庭の子どもが取り組んでいる家庭学習の質と学習方法の効率性の問題。

→塾や家庭教師、ICTを活用した学習環境が整っていない中で、教師の手厚いサポートのもと学校から出される宿題や反復学習をのみ丁寧に時間をかけて行っている可能性

→それにより「基礎的・基本的」と理解されている個別的な知識や技能を確実に習得する子どもが多く、その点での学力は定着しているとみられる。

→SESの低い家庭の子どもにこそ「基礎的・基本的」と理解されている個別的な知識にとどまらず、概念的な知識や「思考力・判断力・表現力等」の資質・能力を高める方策が必要ではないか（そうした子どもこそ、復習や反復学習で基礎・基本といわれるものを確実に定着させることこそが重要とする立場もあるが、自分はそれには組みしない）

→あらためて、各教科固有の見方・考え方を発揮するような「活動を通して」学ぶという学習指導要領の記載に基づく授業作りを定着させていくとともに、教師の過度な負担によって成立するような補充的学習や家庭での学習に頼らないで済むよう、授業を中心として資質・能力の3つの柱を着実に習得させるカリキュラムマネジメントを行っていく必要があるのではないか。

→宿題や家庭学習のあり方もカリキュラムマネジメントに含めて学校全体で計画的に検討する必要があるのではないか。